再建後の移徙からみる西高木家陣屋天保度上屋敷御殿の空間構成について

A STUDY ON THE SPATIAL COMPOSITION OF THE NISHI TAKAGI JINYA THROUGH CEREMONIES MARKING ITS REOCCUPATION AFTER REBUILDING IN THE TEMPO ERA

大橋正浩*, 溝口正人**

Masahiro OHASHI and Masato MIZOGUCHI

The residence (jinya) of the Nishi Takagi, local rulers of Hatamoto status, combined residential with governmental functions, like other leading samurai houses. It was composed of many rooms, some ceremonial and administrative and others living spaces for members of the Nishi Takagi family.

This paper investigates how its spatial composition related to function, through an analysis of records of the re-occupation of the upper residence of the jinya after rebuilding following a fire in the Tempo era (1830s). The results may be summarized as follows:

1. The upper residence consisted of 3 buildings, the Omote, the Oku and the Daidokoro, and it was subdivided into 3 zones, the Omote, Naka-oku, and O-oku.
2. The Omote zone was used by male family members, and for official audiences, the Naka-oku was a suite of living rooms for the lord himself, and the O-oku was used by the women of the family.
3. Both the Omote and the Oku buildings were divided into south facing audience spaces and north facing living rooms for family members.

Keywords : Samurai residence, Jin-ya, Hatamoto, Kotai Yorai, Nishi-Takagis' family, Takagi family documents

武家住宅, 陣屋, 旗本, 交代寄合, 西高木家, 高木家文書

1. はじめに

本稿は、知行地の在地支配を行った旗本（在地旗本）である交代寄合美濃衆 西高木家の居館である天保度上屋敷の御殿^{注1)}（以後、天保御殿と表記）を対象として、様々な室群が同居する家族の生活にどのように対応していたかという御殿の空間構成について、移徙時の儀式で用いられる場所と参加者との関係から明らかにする。

在地旗本は妻子と在地居住して参勤交代する旗本で、高木家も同様であった^{注2)}。石高で同様でありながら知行地には代官を置き、妻子ともに江戸住まいであった一般の旗本、あるいは家格として同列の位置づけであるが、正妻が江戸住まいであった大名、いずれとも居住形態は異なる。規模は異なるが、妻子と同居する点では江戸城に居を構える将軍家と同様である。在地旗本の居館の空間構成を明らかにすることは、居住形態と空間構成がどのように関係したかという、近世武家住宅の実態解明につながり、江戸城をはじめとした他の事例の理解に還元できると考えられる。

2. 西高木家の概要と天保再建移徙の経緯

美濃国石津郡多良・時両郷（現在の岐阜県大垣市上石津町）を知行地とする交代寄合美濃衆 高木家は、中世多羅城跡とされる丘陵地に屋敷を構えた。分枝した三家は、屋敷の位置から西家（2300 石）、東家・北家（各 1000 石）と称され、名字に屋敷の位置を重ねて通称される（以下ではこの通称に従う）。西・北の二家は上屋敷・下屋敷といった複数の居館を構え^{注3)}、屋敷の周囲には武家地^{注4)}や町が形成された（図1）^{注5)}。

このような、三家の知行地支配、家政、勤役などを記した文書が、『高木家文書』（以後、高木家文書と表記）で^{注6)}、西高木家については屋敷の造営に関する文書や屋敷図も確認されている。基本的な文献については別途、報告書^{注7)}で分析したが、本稿では高木家文書のうち、天保3年再建後の移徙手順が記された『天保三壬辰年 御家移ニ付取扱一件 十二月』^{注8)}（以後、取扱一件と表記）に注目する。

再建移徙の原因になった火災とその後の対応について記した『御焼失一件日記』^{注9)}によると、火災は天保3年(1832)3月4日午ノ中刻、北高木家から起こった。西高木家も上屋敷と下屋敷が類焼、

本稿の内容の一部は、大橋正浩、溝口正人：「『天保三壬辰年 御家移ニ付取扱一件 十二月』にみる西高木家天保再建御殿の空間構成－高木家文書による研究 その4－」、日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.847-848, 2012.7において発表している。

* 名古屋市立大学芸術工学部 研究員・修士(芸術工学)

** 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 教授・博士(工学)

Research Fellow, School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., M. Des. and Arch. Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., Dr. Eng.

結果として御殿をはじめほとんどの建物が焼失し、御殿が再建されるまでの期間、家中屋敷数軒を仮住居とした^{注10)}。

取扱一件によると、火災から9か月後の天保3年12月3日に移徙は行われており、儀式には系図(図2)に示す家族6名[殿様(経貞)、奥様(於雅)、若殿様(貞広)、慎之介様(貞徳)、鎮姫様、於銚様]^{注11)}のほか、家臣たち(御家中、御徒士、御徒士格、役人、給人、御目付、御近習、奥掛かり御用人、医師など)が参加している。

3. 天保再建移徙の手順

取扱一件には、移徙手順として儀式の内容・参加者・用いられた場所が記されている。取扱一件に記される場所と内容をもとに当日の移徙の進行手順についてまとめたものが図3である。当日、多くの部分で女性家族と男性家族に分かれて儀式を行っていることがわかる。図中には儀式の実行順に番号をふり、女性家族のみの儀式には「f」、男性家族のみの儀式には「m」を付けて表記した。

3-1. 仮住居から御殿まで

仮住居から上屋敷御殿までは、女性家族と男性家族に分かれて移動している。女性が先行し、男性が時間差で後行する。別々の移動ではあるが、上屋敷まで男女とも同じ経路で進む(図1)。女性家族の出発は「卯上刻」で男性家族は「卯刻」、現在の暦の1月半ばであるから出発は未明である。

「御仮居」を出発し(I f、I m)、「御家中町」を通り(II f、II m)、「宮坂本町通り」^{注12)}を経て(III f、III m)、「御枅形表御門」から上屋敷へ入場している(IV f、IV m)。その後、御枅形表御門から御殿までは記されていないが、参殿に用いた玄関は男性家族が「表御玄関」、女性家族は「御廣敷」と使い分けている。後述する天保再建屋敷図をもとに対応する門から入場したと考えると、女性家族は「御廣敷」に近い「臺所門」(V f)を、男性家族は「表御玄関」に近い「表仮門」(V m)を通ったことになる。

3-2. 御殿内の儀式

儀式には大きく、着座する家族に熨斗が献上される祝儀と、家族どうし、あるいは家族と家臣の対面のふたつがある。取扱一件からは、御殿内の儀式でも多くの場合で男性と女性の家族が別行動した様子が確認できる。以下、順を追って確認する。

御廣敷の玄関から入った女性家族3名は「奥様御居間」で熨斗献上の後(2 f)、鎮姫と於銚は「御部屋」でさらに熨斗献上を行った(3 f)。時間的な前後は明らかではないが、別動した男性家族は「表御居間」で「大熨斗」^{注13)}献上(2 m)、続いて若殿様と慎之介は「御部屋」でさらに熨斗献上となる(3' m)。別途、殿様は「御中奥」で熨斗献上となる(3 m)。

「大奥御対面所」で初めて家族全員が同席し(4)、家族同士の対面、「大熨斗」献上の後に一献となる。その後、殿様と若殿様が「表御居間」(5 m)、女性家族が「大奥御対面所」(5 f)^{注14)}で、それぞれ関係する家臣との対面を行なう。家臣との対面が記されない慎之介は、そのまま「御部屋」(5' m)に留まったと考えられる^{注15)}。以後、参加者は不明であるが鎮守へ参詣した後、再び家族全員が「大奥御対面所」に揃い、家族同席での食事が行なわれている。

3-3. 移徙儀式の性格の相違

以上、整理した儀式の内容、参加者、用いられた場所から、儀式としての移徙の性格を整理する。

図1 高木三家の屋敷配置と西高木家上屋敷までの移徙経路

図2 移徙当時の家族構成

図3 移徙手順図

仮住居から御殿までは、陣屋敷地内を通るのが最短であるにも関わらず、道程を迂回して町を経由し、御枳形表御門から入場する。御殿までの移徙が知行地内における公的な儀式としての性格を有していたための経路選択であろう。一方、御殿内では参加者全員が西家に関わる身内の人間であり、儀式の内容は家族個々や家族同士、家臣に関連するものに終始している。公的な性格を持つとはいえ、本来は引越という家族の私的な儀式として行われたと考えられる。

さらに御殿内の儀式内容に注目すると、儀式は熨斗献上と家族や家臣との対面があるが、御殿における日常生活の有り様が儀式内容に反映されていることがわかる。すなわち家族は女性家族と男性家族に大別され、熨斗献上の祝儀の場所が家族構成員個々に設定されており日常の居所に関係しているらしいこと、家臣を含めた参加者それぞれの社会的な位置付けが参加儀式の場所選択に関連していることが理解できる。では儀式が行われた場所は、具体的に御殿平面のどのような室、位置であったのか。以下、平面との比較から場所を比定する。

4. 天保御殿平面における移徙儀式が行われた場所の比定

4-1. 天保御殿の平面構成

各種屋敷図に基づく天保御殿の平面と様々な文書に記された室名の同定、さらに室群が表向・奥向、表・中奥・大奥といった領域で認識される平面構成であった点については、すでに高木家文書をもとに整理している^{注16)}。そこで取扱一件の記述との比較から、儀式が行われた場所が平面のどこに該当するかを整理する。まず分析の前提となる天保御殿の平面構成を概観したい(図4)。なお天保再建当初を描くと考えられる屋敷図^{注17)}(以下、天保再建屋敷図と表記)が近年発見されたため、本稿では、この天保再建屋敷図をもとに移徙段階での室配置図を新たに作成した。

天保御殿は、大きくは3棟の建物からなる。中庭を挟んで建つ東西棟の2棟のうち、南側が表棟、北側が奥棟で、さらにこの2棟の東妻をつなぐ形で、南北棟の長大な建物が建つ。玄関や台所などを含む台所棟である^{注18)}。一方、居住者の相違に基づく空間領域は建物配置とは別途設定されており、大きくは表向・奥向に大別される。台所棟は南北棟の途中で表向・奥向に分かれていて、西側を南北に貫く廊下も御錠口で分割されている。さらに奥棟は、御中奥と称される西妻部分の室群と大奥と称される東半の室群からなっており、中奥・大奥は、それぞれ奥棟東西端に取り付く別の廊下で表棟と繋がっている。

4-2. 移徙儀式が行われた場所

取扱一件に記される移徙儀式が行われた場所は、「表御玄関」「表御居間」「竹之間」「御中奥」「御廣敷」「奥様御居間」「大奥御対面所」である。平面をみると複数室からなる場合があるが、取扱一件に詳細は記されないため、儀式が一室に留まるものが複数室にわたるものかは特定できない。しかし室群としてみれば平面に齟齬なく対応し、儀式の行われた場所が想定できる。以下、対面・熨斗献上といった儀式ごとに平面上の場所を確認する。

関係する家臣との対面が行われたのは、殿様・若殿様が「表御居間」(5m)、女性家族が「大奥御対面所」(5f)である。それぞれ表棟、奥棟の南面中央を占め、西側に床・棚を備えた「上之間」から3室が連なる室群で、畳敷きの縁座敷が付属する。この二つの室群

でのみ対面が行われ大熨斗献上が行われている。なお殿様・若殿様の対面では、家臣の身分に応じて「表御居間」とともに隣接する「竹之間」も用いられている。

大熨斗が献上された上記2室群の他、熨斗献上が行われた場所は、女性家族に関係する「奥様御居間」「御部屋」と、男性家族に関係する「御中奥」「御部屋」である。

「奥様御居間」(2f)は奥棟北側西寄りを占め、北側庭に面する床・床脇を備えた主室と押入を備えた次の間の南北2室からなり、北側に縁を伴う。鎖姫と於銚が熨斗を受けた「御部屋」は、2名それぞれ別室であったのか、儀式として2人1か所で挙行されたのかはわからない。しかし同じく奥棟の「奥様御居間」の東側には、同様に南北2室からなる「鶴之間」「菊之間」「鷺之間」(3f)があって、「御部屋」はこれら3室群のいずれかに該当するとみることができる。つまり大奥に属する奥棟北側室群が、熨斗献上の場となった。

これと異なり、男性家族が熨斗を受けた場所は、複数殿舎に分かれている。殿様が単独で熨斗を受けた「御中奥」(3m)は、奥棟の西側を占める。床・棚・付書院を備えた「上之間」から南北に3室が連なる室群で、畳敷きの縁座敷が付属する。この3室構成は「表御居間」「大奥御対面所」と同様で、「奥様御居間」など熨斗献上のみが行われた他の場所とは異なっている。一方、若殿様と慎之介が熨斗を受けた「御部屋」に相当するのは、部屋名からみて、表棟北面東側を占める「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」(3'm)の2室と判断できる。

4-3. 儀式間の移動経路

このように儀式が行われた場所が明らかになる一方で、取扱一件には移動経路に関する記述は無い。ただし儀式の場所を室配置図(図4)に落とし込むと、平面上で経路が想定できる。

表向から奥向への経路に着目すると、表から中奥への殿様の移動には「御中奥御廊下」、若殿様と慎之介の「大奥御対面所」への移動には「三ノ間御廊下」、家臣の移動には「大御廊下」・「御錠口内大廊下」が用いられたと想定される。使用者に応じて動線が分離されており、平面に反映されていることがわかる。なお、その他の移動経路は明確ではないが、性別や身分に応じて入口玄関が複数設けられており、接続する廊下、縁などが経路として想定される。図4にはそのような想定に基づく一案を記入している。

5. 儀式からみる御殿の平面構成と空間的性格

以上、移徙儀式が行われた場所は、日常生活時における空間的性格の相違を反映していると考えられ、室構成と付随する建築装置から、その相違を読み解くことができる。以下、公的な儀式といえる対面、生活の場としての居住の観点で整理し、天保御殿の平面構成を分析する。表1は、儀式が行われた場所ごとに、室構成、規模、座敷飾の構え、天井高といった建築構成を整理したものである。

5-1. 対面空間

表棟、奥棟の南面が、表向、奥向における対面儀式に対応した空間であり、座敷飾もそのような儀式に対応した構成を示していることがわかる。前述の通り、表棟の南面を占める「表御居間」と奥棟の南面を占める「大奥御対面所」は、室名に示されるようにいずれも西を空間的に上位とすると理解でき、西側に床・棚を備えた「上之間」から3室が連なり、畳敷きの縁座敷が付属する。どちらも次

の間北面にも床を有するから、南の庭に向かう形で次の間が使用される場合が想定される。

一方で、举行された儀式からは「表御居間」と「大奥御対面所」の空間的な性格の相違も読み取ることができる。すなわち、家族に限定された対面や食事といった私的ともいえる儀式は「大奥御対面所」で行われており、対面所とはいえあくまでも大奥という空間的な性格を反映した場所であったことがわかる。取扱一件によれば、この空間的性格を反映して、両所で実施された対面は実施手順が異なっている。「表御居間」での殿様・若殿様と家臣の対面では、主人との目通りができない身分とされる徒士と徒士格^{注19)}が、隣接する「竹之間」で同時に拝謁している(5m)。表御居間と竹之間で行われる対面は、封建制に基づく身分の上下が使用する室の相違で可視化された儀式であったといえる。一方「大奥御対面所」での女性家族と家臣の対面は(5f)、両者の間に「御取次」を介する形式であった。御取次の存在は、日常の奥向における要件伝達の場合も同様であり^{注20)}、形式で同じといえる。

このような性格の相違に留意すると、「表御居間」と「大奥御対面所」の建築的な相違も注目される。奥向に位置する「大奥御対面所」は、表とは異なって女性家族が利用する場であり、家族同士の対面や食事、取次を介した家臣との対面まで多様な儀式が行なわれた。そのためか「表御居間」より1室ごとの規模が大きい。一方で「大奥御対面所上之間」には床・棚を構えるが付書院はない。さらに天井高をみれば^{注21)}、「大奥対面所」は2945mm(9尺7寸)、「御中奥御居間」が3209mm(10尺6寸)であり、「表御居間」の天井高は不明であるが、「御中奥御居間」よりは高かったであろうから、「大奥御対面所」は平面規模に反して天井高の低い空間であったことがわかる。

つまり「表御居間」と「大奥御対面所」は、どちらも対面など公的な儀式に対応した空間であり、3室が連続し縁座敷が付属する平面構成で同様であった。一方で、座敷飾りや天井高さの相違に、表と奥という空間的性格が反映されていたと理解できる。

5-2. 居住空間

熨斗献上の祝儀が行われた場所のうち、平面構成で他と大きく異なるのが「御中奥」である。畳敷きの縁座敷が付属する3室構成は「表御居間」や「大奥御対面所」と同様で、主室に付書院を設ける点では「大奥御対面所」よりも格式ある意匠といえる。ただし次之間には床を設けない。前述の通り、この中奥部分は明治の改変を経て現存しているが、竿縁天井で縁座敷を含めて室内に長押を回す点で「大奥御対面所」と同様だが天井高は高い。天井高に大奥と中奥の空間的性格の相違が示されたものと理解できる。休息の間や寝間といった殿様の寝所に該当する室名が天保御殿には見いだせないが、殿様が単独で熨斗献上を受けたことに示されるように、表玄関から最も奥に位置し、かつ室名から大奥に関連すると考えられる「御鈴之間」「御化粧之間」が隣接する御中奥御居間が、殿様の寝所としても機能した可能性が高い。

女性家族の熨斗献上の場となった奥棟の北面には、南北2室からなる「奥様御居間」「鶴之間」「菊之間」「鶯之間」が連なる。これらは女性家族の居室で、「鶴之間」「菊之間」「鶯之間」のうちのいずれかが鎮姫と於桂の居室に充当されたことになる。「奥様御居間」主室は座敷飾として床と床脇が設けられるが、以外は床と押入の構成である。現存遺構の痕跡から「奥様御居間」東隣の「御化粧之間」は

表 1 儀式に用いられた場所の建築構成

空間	対面		居住			
室名	表御居間	大奥御対面所	御中奥御居間	奥様御居間	表御子様方御部屋	鶴之間・菊之間・鶯之間
室構成	3室+縁座敷	3室+縁座敷	3室+縁座敷	2室+落縁	2室+落縁	2+落縁
規模(畳)	12+12+10+縁座敷	15+15+21+縁座敷	10+8+6+縁座敷	8+6	8+6	8+6
座敷飾	床・床脇・付書院・次の間床	床・床脇・次の間床	床・床脇・付書院	床・床脇	床・(押入)	床・(押入)
天井高(mm)	不明	2945(9尺7寸)	3209(10尺6寸)	3180(10尺5寸)?	不明	3180(10尺5寸)?
長押	有り?	有り	有り	無し?	不明	無し?

図5 空間構成図

天井高3180mm(10尺5寸)、室内に長押を回さない構成であったことがわかる^{注22)}。室内の意匠が不明な「奥様御居間」以下の諸室も、同様な意匠・構成だったではなからうか。

表棟の北面には、「北御座之間」「北御座之間御次」「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」の4室が東西一列に並ぶ。東側「表御子様方御部屋」の2室が、若殿様と慎之介の居室に充当されたと考えられ、床と押入が設けられる。一方「北御座之間」は座敷飾として床と違棚を構えており、より格式の高い部屋となる。殿様の日中の居室、あるいは執務室とも考えられるが明確ではない^{注23)}。ただし、これら表棟北面の4室は相互が建具で仕切られた室で^{注24)}、西から「北御居間上之間」「北御次」「北御三之間」「北四之間」と連続する室名で記されている場合もある^{注25)}。空間的には一連と認識されていたことになる。

以上、表棟、奥棟は、いずれも南面と北面で空間的性格が異なっており、南面が対面空間、北面が居室空間となっていた。さらに対面空間と平面構成で類似する奥棟の西半の中奥は、殿様の専有空間であったと考えられる。

5-3. 儀式に用いられなかった室群

儀式において家臣は、表は「表御居間」まで、大奥は「大奥御対面所」まで参入しているが、平面でみると取扱一件に記されない、つまり儀式の場所として記されていない室も多い。台所棟の多くの室が該当するが、そのうち表向に属する「御臺所」「御祐筆部屋」「詰所」「紅葉之間」「侍部屋」「侍部屋履怒き」などは、室名と位置からみて、家臣の日常的な役務に用いられたと考えられる。一方、台所棟の御錠口以北に位置する「御臺所」「御老女部屋」「女中部屋」「御茶之間」などは、位置と室名から御老女や女中たちの役務に用いたと考えられる。平常時における御錠口以北への参入は制限されていた可能性が高い。

6. まとめ—天保御殿の空間構成から—

以上、西高木家陣屋天保御殿について、移徙時の儀式で用いられた場所の分析から、御殿平面が家族の生活にどのように対応していたかという空間構成について明らかにした。

大名屋敷の作事や移徙に関する儀式の歴史的な分析については渋谷葉子氏の論文に取り上げられている^{注 26)}。ただし儀式と居住者の相関、その先に見えてくる居住者による利用実態まで分析した事例はない。本稿では、あくまでも詳細が把握可能な事例ではあるが、移徙という居住に関わる儀式の分析から、平面だけでは把握できない利用実態と空間的な性格が把握できることを示した。以下では関連する先行研究の成果を踏まえ、以上のまとめとしたい。

移徙の儀式からみた天保御殿の空間構成は（図5）、表向は男性が参画する対面空間（Am）、男性の居住空間（Bm）、家臣の役務空間（Cm）から構成され、奥向は女性が参画する対面空間（Af）、女性の居住空間（Bf）、女中たちの役務空間（Cf）から構成される大奥と、殿様の居住空間（B'm）である中奥からなる。表向、奥向ともに対面、居住、役務という三つの空間から構成されるが、表向と奥向それぞれに、対面を行う公的な空間と居所となる私的な空間が共存し、同居する家族の生活と儀式に対応していた点が注目される。

作事文書から萩藩毛利家の江戸屋敷の空間構成の変遷を分析した高屋麻里子氏は^{注 27)}、上屋敷が表御殿（本稿、天保御殿の表向に相当）と裏御殿（天保御殿の奥向に相当）からなり、それぞれが玄関と接客空間を備えるに至る変遷を明らかにし、従来私的な空間とされてきた裏御殿における接客空間の存在に着目すべきと指摘する。さらに江戸城本丸御殿の大奥御殿向殿舎（天保御殿の大奥奥棟部分に相当）の格式に注目する服部佐智子氏は^{注 28)}、従来私的とされてきた大奥御殿向が公的空間（御座之間、御対面所）と私的空間（御守殿、御小座敷）からなり、それぞれ表向（御対面所、御守殿）と内向（御座之間、御小座敷）に分かれ、御小座敷を除く大奥3殿舎が対面・接客にも用いられたとする。

このような近年の研究成果を踏まえるならば、表向と奥向に公的な空間と私的な空間が共存している点は、本稿でみた在地旗本の高木家をはじめとして、ある階層以上の近世武家住宅の空間構成の共通性として指摘できそうである。万延元年（1860）11月9日に行われた江戸城本丸再建移徙の移徙手順をみると^{注 29)}、使用する玄関や経路が将軍と女性家族で相違する点、表と大奥、それぞれで家臣との対面が行なわれている点に、天保再建移徙との共通性が指摘できる。

一方で上記江戸城再建移徙において「御座間」で行われている主人の居室における家臣との対面が、西高木家では行われていない。このように将軍を頂点とする近世武家住宅は、時代的な変遷と封建制に基づく家格の相違を反映して、居住形態や建築構成が一樣ではなく、展開される儀式も同一ではないことも明らかである。こうした儀式の共通点と相違点は、改めて平面と関連させて分析すべき事項といえる。

また天保御殿では、表棟と奥棟それぞれ、同一殿舎内に居住空間と対面空間が併存している点が建築的な特徴として注目される。大名屋敷の殿舎と機能の関係に注目した平井聖氏は、明暦大火後の大名屋敷の殿舎について、対面・接客機能と居住機能が分化した1列形の平面への変化を指摘する^{注 30)}。萩藩毛利家の江戸桜田上屋敷は表御殿と裏御殿にそれぞれ居住空間と対面空間を備え、空間構成に

ついては天保御殿との類似がみられるが^{注 31)}、各空間は別々の殿舎となっており、平井氏の指摘と同様の傾向がある。同一殿舎内に居住空間と対面空間が併存する構成が特殊であるか、ある階層や地域で普遍性を持つものであるのかについては今後の検討課題である。

謝辞

岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡の実測調査にあたっては大垣市教育委員会、高木家文書の閲覧にあたっては名古屋大学附属図書館研究開発室に多大な協力を賜りました。記して感謝いたします。

参考文献

- 1) 西田真樹：交代寄合美濃衆高木家年中行事-春-, 宇都宮大学教育学部紀要 第41号 第1部, pp29-41, 1991.3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-夏-, 宇都宮大学教育学部紀要 第42号 第1部, pp51-60, 1992.3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-秋-, 宇都宮大学教育学部紀要 第43号 第1部, pp35-53, 1993.3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-冬-, 宇都宮大学教育学部紀要 第44号 第1部, pp69-81, 1994.3
- 2) 可児市史 第2巻 通史編 古代・中世・近世, 2010
- 3) 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室：名古屋大学附属図書館2009年春季特別展（地域貢献特別支援事業成果報告）旗本高木家主従の近世と近代-高木家文書と小寺家文書-, 2009
- 4) 大橋正浩他：「高木三家鳥瞰図」の分析からみる西高木家陣屋下屋敷の成立について、日本建築学会東海支部研究報告集 第49号, pp749-752, 2011.2
- 5) 上石津教育委員会：新修上石津町史, 2004
- 6) 大橋正浩他：旗本西高木家陣屋の建築的変遷について—高木家文書による研究 その1—、日本建築学会東海支部研究報告集 第46号, pp721-724, 2008.2
- 7) 溝口正人編・執筆：岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書, 大垣市教育委員会, 2009.3
- 8) 大橋正浩他：旗本西高木家陣屋の天保再建建物の平面構成について—高木家文書による研究 その2—、日本建築学会東海支部研究報告集 第46号, pp717-720, 2008.2
- 9) 岐阜県大垣市教育委員会：大垣市埋蔵文化財調査報告書第23集 岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡-測量調査・発掘調査報告書-, 2013
- 10) 上石津町編：上石津町史 史料編, 1975
- 11) 国史大辞典編集委員会編：国史大辞典 第3巻, 吉川弘文館, 1983
- 12) 渋谷葉子：幕藩体制の形成過程と大名江戸藩邸, 徳川林政史研究所研究紀要 第34号, 財団法人徳川黎明会, pp89-106, 2000
- 13) 作事記録研究会編：大名江戸屋敷の建設と近世社会, 中央公論美術出版 2014
- 14) 平井聖：日本住宅の歴史, 日本放送出版協会, 1974
- 15) 服部佐智子他：弘化期・万延期における江戸城本丸御殿大奥御殿向の室内意匠による殿舎の格, 日本建築学会計画系論文集 第79巻 第697号, pp789-797, 2012.3
- 16) 尾張徳川黎明会：徳川礼典録, 下巻, 1942
- 17) 平井聖：日本の近世住宅, 鹿島研究所出版会, 1968
- 18) 鈴木賢次：旗本住居に関する研究, 私家版, 1987
- 19) 深井雅海著：江戸城 - 本丸御殿と幕府政治, 中公新書, 2008
- 20) 服部佐智子他：江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について、日本建築学会計画系論文集 第74巻 第641号, pp1631-1640, 2009.7
- 21) モリス マーティン・N：小笠原家 江戸時代旗本屋敷の復原, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F 都市計画 建築経済 住宅問題 建築史 建築意匠, pp667-668, 1986.8
- 22) 作事記録研究会編：萩藩江戸屋敷作事記録, 中央公論美術出版, 2013

注

注 1) 西高木家陣屋上屋敷の住居部分を本稿では「御殿」と呼称する。上屋敷にはこの他に付属建物として門、蔵、長屋（倉庫）などがある。

注 2) 参考文献 1) では寛永3年（1750）から文化11年（1814）までの高木家の年中行事について分析するが、若殿様や女性家族の知行地での生活が確認できる。

注 3) 注 5 で述べるように、天保焼失時点で北家には下屋敷が存在した。高木家以外の事例として、参考文献 2) によると、幕府と尾張藩の両方に属した、在地旗本 4600 石の千村家は、知行所である久々利(岐阜県可児市)に上屋敷と下屋敷を含む陣屋を構えた。上屋敷は主人と家族の居住と役所の機能をもち、下屋敷は隠居所や若殿様の居住に用いられたとされる。

注 4) 参考文献 3) によれば高木家領の兵農分離は文政 8 年(1825)に家政改革の一環として行われている。この時、家臣 12 名には高木家屋敷近辺への屋敷移転を命じており、武家地形成の一因になったと考えられる。

注 5) 『上石津町基本図』(平成 8 年)を下図とし、天保 8 年から嘉永 5 年の状況を描いた(参考文献 4 参照)、参考文献 5) 所収の『旗本三高木館鳥瞰図』(以下、鳥瞰図)、安政 4 年以後の状況を描いた(参考文献 6、8 参照)『上石津郷土資料館所蔵絵図』(以下、安政屋敷図)、後述する天保再建屋敷図、『明治廿一年五月調 上石津郡宮村字繪圖 養老郡多良村大字宮』(以下、字絵図)の比較により作成した。鳥瞰図には西高木家陣屋の南西に複数の建物が描かれるが、安政屋敷図には同位置に家中屋敷という書き込みがあり、武家地の範囲が推定できる。また後出の焼失日記によれば、西家が家中屋敷を御仮殿としたのに対し、出火元である北家は、「下屋舗」に移ったと記される。位置や規模は不明であるが、北家にも下屋敷が存在し類焼を免れたことがわかる。

注 6) 現在名古屋大学附属図書館には、総点数 10 万点に及ぶ資料が収蔵保管され、5 万 2 千点については目録 5 巻が刊行されており、文書には附属図書館独自の整理番号が当てられている。現在も附属図書館研究開発室では、残る書状類 4 万点余の整理及び関連史料の調査・研究が進められる。

注 7) 参考文献 7) 参照。

注 8) tfga-0106-003(高木家文書。名古屋大学の分類番号による。以下同じ)

注 9) tfga-0005-001。以下、焼失日記と記す。同記によれば、幕府には「御類焼之覚」、尾張藩は「覚」として、焼失建物の一覧を提出している。高木家文書には、類焼以前の各種屋敷図が残されており (tfgd-0004、tfgd-0010、tfgd-0047) 、類焼以前の屋敷の建物構成がわかる。これら屋敷図と一覧を比較すると「表奥御住居」「御下屋舗御住居」など主だった建物が焼失していることがわかる。

注 10) 焼失日記には「御仮住居正覚と申候而者御不都合故御家中屋敷式三軒為取付け」とあり、取扱一件には「御仮殿より御家中町宮坂本町通り…」とある(下線は筆者による)。場所と建築的な実態の詳細は不明であるが、西高木家陣屋南西の御家中町に建つ家中屋敷の何軒かが仮住居に充てられたと考えられる。

天保三壬辰年 御家移二付取扱一件 十二月	一 夫より大奥御対面所江 殿様始御方々様被入御対顔被為在候 右御席江大熨斗差上候 右被為相濟
(中略)	御座附 御吸物 御酒 但し御冷酒 御肴 巻鰯
御引移御願	一 殿様 若殿様 表御居間御着座 御家中一統一列限 恐悦申上候御徒士 之者竹之間二而恐悦申上候徒士格同断
十三日卯上刻 一 奥様 鎮姫様 御銚様 御同道 御仮殿より御家中宮坂本町通り 御枳形表御門御廣敷より 奥様御居間江御着座 右御着座之上御熨斗差上候 鎮姫様 御銚様 者 奥様御居間江御同座之上御部屋江御着座 御熨斗差上候	一 奥様御始御方々様江御役人共大奥二而 御前江罷出恐悦申上候 一 御同所様江御給人御目付御近習者奥掛り 御用人込恐悦申上夫より御取次を以申上候事 一 御医師御大奥江罷出恐悦申上候事 右恐悦相濟 一 御鎮守三社江御参詣被遊候事 一 流彦大明神江御名代相動候事
十三日卯刻 一 殿様 若殿様 慎之介様 御同道 御道筋前同断 表御玄閣より御居間江御着座 右御席江大熨斗差上候 若殿様 慎之介様右御同座之上御部屋江 御着座 御熨斗差上候 一 殿様御中奥江御着座 御熨斗差上候	一 大奥対面所江 殿様 奥様 若殿様 御着座 慎之介様 鎮姫様 御銚様 御料理一汁三菜 差上る
御家移二付取扱一件【tfga-0106-003】から抜粋	

注 11) 参考文献 9) p233、参考文献 10) pp28-47 の『文政五年八月 40 高木系譜』を参照。

注 12) 取扱一件に「宮坂本町通り」と記される。高木三家屋敷地周辺を字絵図では「宮村」と記し、屋敷図にも記される大神神社(明治 4 年に流彦大明神から社号を復古)周辺は、現在も「宮町」と呼び、南北に抜ける通称「伊勢街道」沿いには近世から町場が形成されていた。大神神社南には西から東への下り坂があり、屋敷図にも記されるが、これが「宮坂」と称されたのであろう。

注 13) 「大熨斗」の詳細は不明。「御席」への献上と記されており、個人へ

の献上となっている熨斗と相違する。

注 14) 女性家族と家臣が対面する場所は「大奥」とのみ記され、具体的な室名が不明であるが、直前には「大奥御対面所」で家族同士の対面をしており、引き続き同所を用いられたとみられる。

注 15) 後述するように若殿様と慎之介様が祝儀を受けた「御部屋」は「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」に該当すると考えられる。対面の間、慎之介は居室である「御部屋」に待機していたのであろう。

注 16) 参考文献 7) 8)。平面構成の特徴については、参考文献 7) 調査報告書 pp23-24 参照。

注 17) 整理番号は当てられていないが、名古屋大学附属図書館高木家文書デジタルライブラリーで閲覧可能である。天保再建屋敷図が天保再建直後を示すと考えられる特徴として、「表仮門」「仮玄閣」という書き込みがあること、下屋敷敷地に嘉永 5 年(1852)建造の御殿等の建物が記されていないこと、天保度御殿造営に関する文書である『御普請中諸職人諸色勘定帳』[tfga-0005-006] (以下、勘定帳と表記)に記される室名と規模に一致がみられる一方で、安政以後の改造が反映されていないがことなどがある。なお安政の改修で玄閣・使者の間は 2 室に分割されている。

注 18) 造営に関する勘定帳 (tfga-0005-0006) には、3 つの殿舎について「表御居間」「奥御居間」「御臺所」といった名称で記され、単位は「棟」が用いられている。「表御居間」「御臺所」については室名としても同様の記述があり、殿舎名か室名かの混乱を防ぐため、本稿では便宜上「表棟」、「奥棟」、「台所棟」と表記する。

注 19) 参考文献 11) 「かち(徒)」の項参照。大名や大身の直参・陪臣など、諸家における徒士は主人との目通りができない身分とされる。

注 20) 参考文献 3)、p13 参照。類焼前の上屋敷御殿では、家臣が奥様に用件を伝える場合、茶之間で女中が面会して取次いでおり、茶之間が表の男社会と、奥の女社会の接点だったという。

注 21) 参考文献 7)、p27 参照。御中奥御居間と大奥御対面所の一部は遺構で現存しており、廻縁欠き込みの痕跡から旧天井高さがわかる。本稿作成にあたり、旧天井高さを示す痕跡については再度実測を行った。

注 22) 参考文献 7)、p27 参照。

注 23) 参考文献 19) によれば、江戸城本丸御殿では、御座之間が奥の応接間とされる。

注 24) 天保再建屋敷図は柱間装置についても線種を区別して記しており、「表御子様方御部屋」と「北ノ御座之間御次」の間仕切りは建具であったことがわかる。

注 25) 参考文献 8)、p47 参照。

注 26) 参考文献 12) pp86-109、参考文献 13) pp225-254 参照。参考文献 12) では 17 世紀前半における尾張藩江戸上屋敷の変遷を明らかにする過程で、藩主の移徙に触れている。また、参考文献 13) では享保から文政期に行われた萩藩江戸屋敷新築時における儀式の実態を整理している。しかし、2 つの文献共に、御殿平面との対応関係にまでは触れられていない。

注 27) 参考文献 13) 第二章参照。高屋麻理子氏の論文で用いる接客空間は、本稿における対面空間に相当する。

注 28) 参考文献 15) で服部氏は、弘化期・万延期における江戸城大奥御殿向の殿舎の格について室内意匠から格式における序列化を行っている。優位な指標として壁の指標を指摘し、御対面所、御座之間、御守殿、御小座敷の順に格が高いとしている。

注 29) 参考文献 16) 『將軍徳川礼典附録 卷之二十一』、『御本丸御普請出来御移徙』 pp440-455 参照。江戸城本丸御殿との比較は、別稿で詳細な検討を行いたい。

注 30) 参考文献 17)。この指摘を受けて、旗本の江戸屋敷を扱った鈴木賢次氏は参考文献 18) において、大名屋敷ほど殿舎と機能の分化傾向が充分に達成されていないにしても、各棟の機能・性格は基本的に大名屋敷に準じるとしている。また、江戸城本丸御殿の空間構成と殿舎の関係を経年変化という観点から注目した研究に、深井雅海氏の参考文献 19)、服部佐智子氏の参考文献 20) がある。深井氏は將軍の生活空間について、本来は別空間であった中奥と奥の消長から奥の殿舎群の拡充を指摘し、服部氏は、大奥における主人の生活空間と女中の役務空間の分離を指摘している。こうした事例は、殿舎と機能の分化が旗本屋敷から將軍が住む江戸城まで共通する傾向であることを示している。

注 31) 参考文献 22) 附録屋敷絵図 5「江戸桜田御上屋敷新御作事御指図」参照。とくに表御殿には「若殿様御休息ノ間」という若殿様の居室が確認できる。

A STUDY ON THE SPATIAL COMPOSITION OF THE NISHI TAKAGI JINYA THROUGH CEREMONIES MARKING ITS REOCCUPATION AFTER REBUILDING IN THE TEMPO ERA

Masahiro OHASHI and Masato MIZOGUCHI***

* Research Fellow, School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., M. Des. and Arch.

** Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., Dr. Eng.

In the Edo period, apart from castles constructed with the permission of the Tokugawa government, the residences of local warrior-class officials who held their land in lordship were often referred to as jinya. Like the residences of the Shogun and other daimyo, jinya served a dual function, as homes of the ruling samurai and centres of local government. They were made up of many rooms, some of which served as spaces for feudal ceremonies, or as administrative offices, while others were residential spaces for members of the ruling family.

The Nishi Takagi family were hatamoto (bannermen) who ruled a rural area of Western Mino, with their residence (jinya) on the site of a medieval fortress called Tara Castle. The lord's wife and family lived together with him in the Nishi Takagi Jinya. The jinya was divided into two residential complexes. In the north was the principal (upper) residence (kami yashiki), with a lower residence (shimo yashiki) to the south of it, which was used by lords after retirement from active government. In the third year of the Tempo era (1832), both residences burnt down, but by the end of year, the upper residence had been rebuilt.

On 3rd day of the 12th month, 1832, the Nishi Takagi family moved from temporary lodgings into the new upper residence, and ceremonies were held on that day to celebrate the move. In these ceremonies, the men and women of the family set out in 2 separate groups from their temporary lodgings at different times, and the ceremonies in the upper residence were conducted separately for each group.

The ceremonies may be divided into two parts: those concerned with propitiation of protective deities, and congratulatory audiences with vassals and dependents. The spaces where the ceremonies were held seem to reflect their everyday use, and their hierarchical significance and function can be ascertained by analysis of the relationship between the rooms and leading family members participating in the ceremonies. Such analysis reveals that congratulatory audiences were held in spaces usually reserved for formal activities, while offerings were made in the personal chambers of leading household members.

The upper residence consisted of three major buildings, the omote building, the oku building and the daidokoro building. Plans also reveal a division of the residence into three zones: the omote, the naka-oku and the o-oku. These zones do not precisely correspond with the three buildings. By plotting the ceremonial spaces relative to the floor plan, the characteristics and functions of each zone and building can be established.

The division into zones reflects the identity of the users. The omote zone was used by male members of the family. The naka-oku consisted of a private residential suite for the lord himself, and the o-oku was used by the women of the family. The distinctions between the buildings relate to their function. The omote building was predominantly used for official male-oriented ceremonial activities, while the oku was for family activities. However, both of them contained both formal audience rooms and living rooms. The daidokoro housed service personnel and household administration. The jinya was thus composed of many rooms with their own specific functions.

Both the omote and oku buildings were divided into a southern range of spaces and northern range of spaces. In both cases, the southern row of rooms was a formal audience suite, while the northern row of rooms consisted of living rooms for specific family members. This division of these buildings is a distinctive feature of the jinya, and seems to contrast with the arrangement of certain other samurai residences in a way which invites further research.

(2014年5月10日原稿受理, 2014年7月30日採用決定)